プリクラ，インターネット，一人旅

——非日常の中の日常：1995年西宮（12）——

原　田　隆　司

Print-Club, Internet, and Traveling by Herself

——Ordinary Lives in Extraordinary Situations in Nishinomiya, 1995　(12)——

HARADA Takashi

Abstract : This is part of a research project based on our experiences of the Great Hanshin-Awaji Earthquake in 1995. In this paper I focused on the ordinary life of an elder woman living by herself in Nishinomiya. I met her at a shelter in a Junior high school in 1995.

In September 2006, I visited her to talk about her daily life. She is seventy-nine years old now. She has been living by herself for over twenty years. She works at a Print-Club shop, where five photo vending machines are settled. Every afternoon, young students come to take photos by themselves. Every day she cleans the shop space, and does maintenance work for the machines once or twice a month. This is a part-time job, but she really enjoys working and chatting with young female students. She likes traveling by herself. After getting information using internet research, she coordinated her travel to Okinawa Island. She also likes Sudoku and making poems.

She has been living on her own for these twenty years and it is certain that she finds some fulfillment in her life.

二〇〇六年九月の中旬，阪急今津線の駅を降り，川沿いの道を歩く。前日の雨は上がり，曇り空で，まだ秋と言うには早く，サルスベリの紅い花がところどころにみえる。昼下がり，ときおり道路を通る自動車と，近くに空港があるために低く行き来する飛行機の音が聞こえるだけである。

林栄子さん（仮名）に会うのは，十年ぶりである。一九九五年一月一七日の地震の後，ぼくが「ボランティア」をしていた避難所で出会った。若者と同じような色鮮やかな服装が印象的だった。比較的早い時期に仮設住宅に移った彼女から，じっくりと話を聞いたのは九五年の九月と翌九六年の同じ九月であった。

地震の前から一人暮らしをしていた彼女が，避難所を経て，仮設住宅に移ったということだけを考え合わせれば，地震の体験がどれほど大変なものであったかと想像していたのであるが，お話を伺ってみると，それは勝手な思い込みであった。昭和二年生まれの彼女にとっては，地震よりも戦争の体験，あるいは会社の倒産のほうが，遙かに大きな出来事であった。

それから十年。年賀状の交換は続けていた。自身の体験について，極めて率直に話してくれる彼女に，また会ってみたいと思った。今年も同じ9月。訪問して雑談をしたいという手紙を前の週に投函した。予想どおり，すぐに返事が来た。手書きの文章も末尾に添えてあったが，本文はパソコンで書かれたものであった。そして，次の一節に「十年後」という思い込みを，ふたたび覆された。

私は14日・17日・18日のいつでも結構です。15日16日19日は，仕事で，プリクラの受付をします。お役に立つお話できますかしら。普通のおばぁさんですよ。

プリクラの受付とは，また，林さんらしい気もする，と思いつつ，川沿いの道が合流する広い道路に入り，道なりに左に曲がる。人が集まっていた。車道が一部陥没しており，通行止めになっていたのである。作業の人たちと警備関係の人などが車道のあちこちに居る。その向こうに，十階建てほどの建物が三棟見えてきた。あれがきっと団地なのだろう。歩道を進んでいくと，すぐに約束のバス停が見つかった。駅から二〇分であった。

バス停から改めて団地をみると，道路を挟んで目の前であった。比較的古い建物である。携帯で電話をして，そのまま待っていると，道路を警備している男性が，バスは来ませんよ，と声をかけてくれる。昼下がりにバス停で立っていれば，バスを待っているとしか思えないのだろう。違いますと言って意外な顔をされていた時に，団地の建物の横から林さんが歩いて出てきた。

道路を渡り，エレベーターに乗って3階まで上がり，端の部屋に入る。3DKで，南の窓からは木々の枝越しにバス通りを見おろすことができる。

■仮設から団地へ

この建物は，十一階建てです。正確には知りませんけど，もう二十年以上は経っています。ここへ移ってきたのは，平成……どっかに書いてあったな……十一年十一月三日に移ってきたはずです。ちゃんと葉書で出して，みんなに配ったはずなんやけど……あちこち，整理が悪いから……あっ，十年，十年ですね。えー「3年6か月の仮設生活を卒業し，11月3日文化の日に，やっと自分の城に移り，今ほっとした所です」って書いてます。移って来る日を忘れんようにと思て，十一月三日にしました。

市へね「仮設から移りたい」言うて申し込みに行って。駅の前の，電車から降りてすぐの所に市営住宅あるんですよ。でも，それを申し込んだら，いっぱいなんですて。で，「この団地やったら空いているから移りなさい」言われたんです。それから二か月もせんうちに移ってます。

市営住宅しか申し込んでないです。民間のところは広告やら入りますやん，でも高いから。市営住宅やったら震災減免があるんです。二，三回は通いましたね。「もう歳いく一方やから，バスに乗らないで，電車降りたらすぐの市営住宅がこっちにあるのを知ったから，そこに入れてください」というのを言いに行ったんですよ。そしたら「こっちに行きなさい」と言われました。何軒か空いてましたよ。二軒まだ空いてたし，「真ん中にするか端にするか」言うから，「端でいいです，端のほうが隣の雑音が入らないし」言うて。気楽でいいかなと思いました。

仮設から移りたかった。通勤に便利悪いですやん。交通費そんなに出えしません。ここよりは便利いいですよ（笑）。ここはバスが一時間に一本か二本しか出ないんですよ。考えたら，ここは不便ですわね，何にも店がない。駅に行かないとない。たいがいの人は，六十五以上やったら，阪急バスの優待があるんですよ。私ら障害者やから，百十円で乗れますけど。三か月の定期を一万円で売ってくれるんですよ。一回，百二，三十円になりますわな，それ，たいがい買うてはりますわな。私もいちいち券を買うの高くつくから，三か月一万円を利用してますけど。グランドパスいうの，便利ええですよ。

ここは，静かでいいなあという感じでしたね。人によって違うと思いますけど，私は別に悪いところではないと思います。

老人会とか何やとか言うてはりますけど，一切出ません。老人会いうたら，もの食べたり，しゃべりはるこというたら，孫の話，旦那の話，嫁の悪口，そんなん多いですよ，だいたいがね。バスに乗ってどっかに行ったり，食事会したり。私は，それ全然分からんから。他のこと喋れる環境とは違うしね。「皆さんと一緒に食べたら，ストレスがたまる，私は食べられないから，そういう会合は一切ご免蒙ります」言うて。ほんなら「名前だけ貸してくれ」言われて。援助があるんですよね。「ああ，いいですよ」言うて，名前だけ貸しているんですよ。だから，みんなとは打ち解けて話したことないですよ。

■プリクラ

仮設住宅は西宮市の海岸の近くにあった。この団地は，電車だけを考えれば，仮設よりも，勤め先の宝塚には近い。彼女が机の上に出した定期入れには，グランドパスと，この団地の最寄り駅から宝塚までの阪急電車の定期券，そして何枚かのプリクラが入っていた。

こういうのをやってます。

写真を皆取りに来ますやん。このごろ，若いお母さんが，子ども抱いてでも来はりますしね。それか

ら，小学生から高校生までが幅広く来ます。機械は五台置いてます。

前はもうちょっと行ってたんやけど，私が辞めたい言うたんですよ，そしたら「辞めんと，週二日にするから，辞めんといてくれ」言われて。本当はね，センセ，もう七十九になったらね，先のこと考えたらね，やっぱり自分のしたいことをやって，死んだほうがええのとちゃうかなー，いつもセンセに言うてるように，中途半端でしょ（笑）。パソコンやってるんやけど，独学でやってるんですよ。自分で，自分の作った詩をきれいに打って，ちょっと絵でも入れられる，そういうことをやりたいんです。そいで，習いにいきたいからと思って，この間から，辞めさせて欲しい言うてるんですけど。

去年の八月の二十五日から。それまでは，人材センターで仕事してたでしょ。それはもう去年の三月で……。「年寄りいうか，若い年寄りがいっぱい増えるから，林くん，辞めてくれ」言わはったんですよ。三月のはじめにそう言わはりました。そやから「いいですよー」言うて。そしたら今度は，別の人が「あんた遊んだらボケるから，一日おきくらいに，全部とは言わへんから，カルチャーセンターの教室は，掃除のおばちゃんが入ってないから，そこを掃除してくれ」言うて。そいで行ってたら，腰いわしたんですよ。広い会議室みたいなところ，一人で掃除せんならんのです。しばらくがまんしてやってたんやけど，辞める言うたんですよ。そしたら，前から知っている人がちょうど定年退職して，私に「手伝うてくれ」言われて。それがプリクラです。

基本的には，朝十時から晩の二十時まで。長いですよ。でもね，プリクラて，センセも知ってはる？

機械のなかの用紙が切れますやん，写してたら。その入れ替えをせんならんのです，写真の台紙とシールのね。カメラのフィルムはロールになってましたでしょ，ああいう仕組みになってるんですよ。この紙が真っ白の台紙でね，その機械のなかに仕組むんです。それと，シール言うんですけど，紫色と黄色の薄ぺったいロールになってて，入れ替えるんです。うまいことなってますね。ようハヤる機械と，ハヤらん機械あるんですよ（笑）。四十日くらいで交換するのもあるし，一か月くらいでなくなるのもあるし，まあ，今はだいたい短いのでも二十五日は保ちますね。

それはなくなった時にするだけで，後はじーっと座ってたらいいんです。「本を読んでも，ノートパソコンでも持ってきてやりなさい」って言ってくれはるんですけど。朝十時に行って電源入れるんです。でも，だいたい学生さんは三時くらいまでは来ないですね。三時までに来るいうたら，買い物に来た若い奥さんが，赤ん坊の写真撮ったりするのに，たまに寄りはりますけどね。三時以後，学生が多いから，それからです。

私じっと座ってたら冷えるんですよね，お魚屋さん，お肉屋さんあるから。だから，そのまわりくるくる回ってます。「暇やなぁ」言いながら。で，サスペンスを読んで，それからこういうのを読んで，最近はやりの，こんなんやってます，いろいろ買うてきて。

団地の部屋に置かれた背の低い本棚には，コンピュータのマニュアルなどと一緒に，「数独」の本が何冊か立てられている。

お昼は，そこのお店のなかに食べ物屋さんがあるんで，そこで買って食べます。私は胃がないから，ちょっとずつですね。

することは，掃除ぐらいですね。両替は，ちゃんと両替機を置いてます。でも一万円は換えられへんから，私が千円札を二十枚くらい持って行くんですよ。学生もね，金持ちが多くてね，「おばあちゃん，一万円換えてねぇなぁ」言うて。「おばあちゃん，洒落てんなぁ，マニキュアしてんなぁ」言うから「うん，あんたらに，指くらい綺麗にしとかな失礼やろ」言うたら「顔もマニキュアしー」（笑）。「何言ってんの，あんた。高速道路みたいにいっぱい静かに皺いってるやろ」「いやいや，なんぼ高速道路でもかまへんねん，下の百均いったら，おばあちゃん，百円で売ってるで」……ほんまに面白いですよ。「おばあちゃん，お金持ちそうやなぁ」「いやいや，金持ってたら，こんなとこに座りに来うへんで」「いやー，お金あるでー。そんな人ほど，金持ち，けち言うやん」。

お金は全然いじりません。社長が一週間にいっぺん来て，仕事しはるんですよ。お祭りとかの日は，順番待つくらい人も来はるけど，そうでなかったら，まあ余裕ですわ。今は週二回ですけど，社長ともう一人の都合で，来れない日を私に言うて。で，この前，私，忘れたんですよ，頼まれてた日を忘れて，京都に行ってたんですよ。そしたら「病気してたんと違うか，連絡つかへん」言うて，ごっつい心

配して「どうしても携帯電話持て」言わはるんですよ。そいで，やっと先月，持ちました。でも，かけるとこあらしませんやん，別になあ。結局，機械のトラブルあった時に，私，直されせしませんやん，そんな時に連絡しますね。カーテンが降りたとか，いろんなカーテンありますねん，そういうのが上がらんかったとか，連絡するのにちょうど都合がいい。

夜は八時になったら電源切って帰るんやけど，七時四十分になったら一応入れなくていい言うて。二十分ぐらいで写真撮れしませんやん。落書きしはりますやん，あれが皆，長なるんですよね。「時間やでー，時間やでー」言うて。で，私，七時四十分でお客さん来てなかったら切ってしまいますわ。そやないと守衛さんも怒って来はるんですよね。「八時になったら早う出てくれなあかんのに」言うて。警備の人も回らはるでしょ，魚屋さんとか店をみな，順ぐりに。うちだけが，あれしてたら閉められしませんやん。

機械五台置いてるとこ，みなお茶，飲んだもの，そこらへんにほったりね，紙くずほったりするから，掃除はせんなりません。機械も拭いてやらな，落書きしてますねん。

アイスクリームも今売ってるんですよ，受付の横で。それは，一日にね，五杯くらい売れたらええとこ。アイスクリームの入っている，これ位の容器があるんですよ。それを置くと，きゅっと押し出しで出来るようになってるんですよ。それも売ってますけど。若い子やったらね，いっぺん見したら，「うちにさして」言うて，やってますよ（笑）。

■一人旅

昭和二年，大阪に生まれた林さんは，昭和二五年から大阪で役所勤めをはじめるが，四年後に自律神経失調症といわれて入院し，六年後の昭和三五年に退院，京都で父親の事業を手伝いはじめた。しかし，昭和五七年（一九八二年），会社は倒産し，事情があって，彼女は翌年から京都で一人暮らしをはじめた。

私なんでも行きたがりやですから，人に遅れとらんように，この間，ひとりで神戸空港行ったけど，大阪のほうがええですね。周りはきれいですよ，でも空港らいし感じは伊丹，大阪やね。関空に行ったらね，あの展望台で寝転がっても，人は寄って来いしませんでしたね。神戸空港は座るところないんですよ。囲いの網してある，そこらへんで立ってないと，椅子はちょっとしかないです。ほんまに，しょうむない所でっせ。お店もそんなにないです。がっくりしました。

沖縄も行きました，おととし，あんまり回らんと。大好きな飛行機に乗って。友だちに行こうかと言われると，友だちに気遣わなんのがしんどいから，いやなんです。私は私ひとりで。よう新聞なんかに広告出てますやん，共同で皆さん揃て行くのが，ああいうのも嫌なんです。自分はマイペースで，体を維持していかんなんから。しんどかったら一服し，朝も早よう起きてどうこうというんでなしで。そやから自分でパソコンで調べて。どう行けるか，出ますやん，沖縄行って何をしたいとか，食堂，食べ物とか，みなインターネットで見て，そいで行くんです，自分で。切符も高いですよね，それでもいいんです。食事もみんなと一緒のものを食べへんし，それが一番。みんなと一緒に行くの嫌なんです。自分自身で満足できるように行くんです。二泊三日ですよ，沖縄は，だから首里城とか，なかに入ってないんです。そいで，船をちょっと出してもらって，それは共同で乗りましたけどね，海底で珊瑚があって魚が泳いでるのが丸見え，ああいうのは見てきました。後はタクシーで。

おととしの五月には，穂高も，観光バスに乗って。

今年も，岡山に美術館ありますやん，有名な，大原美術館，あそこ行きたいんです，だから今年，絶対行きます。青春きっぷ買うて行ったら面白い。青春きっぷは一枚で買えんですやん，五枚綴りですねんね。だから，「もうこれ使わなもったいないから行こう」言うて。何かね，ひとりで居てて，自分で自分に言い訳をしてしか実行に移しにくい。「こんな歳して，こんなんしてて，ええのなかな」と思う。でも青春きっぷやと，これは絶対使わなもったいないねんから，そしたら，あそこへ行こう，ここ行こう，自分で納得してね。変な理屈つけて。

■詩をつくる

林さんは，本棚から冊子を取り出してきた。

この間から，何かやらなあかんなかぁと思うから，詩を，しょうむないことをやってるんです。作詞家連盟というのがあるんです。「今度，本に入れるわ」言うてくれてはるんやけど。

雲になりたい

人生に　くたびれ
自然もとめて　旅したい
長いながい　ひとり夜に
返事もない　手紙書くの
あやしい魅惑の　あたたかい雲
いのちがけの愛　いとしみながら
雲になりたい

この詩，これは私が空を見るとき，いつも，雲になりたいと思て，空見てんねん。これは詩でなしに，歌詞みたい。この間できて，添削してもろたら，また秋に，何とかいう本に出すから，とか言うてくれてはんねん。一番の「人生にくたびれ」と二番，三番の字数を一緒にせえ，という指導はありましたけど，これは全部自分で作ったもんです，言葉の添削なんかはなかったです。もっともっと作るように言われてるんやけど，こういうのはね，汽車に乗って何かせんと，出てきいひん。

一応ね，自分では，こういう句集を本にしたいんです。ここにちょっと絵を入れたりしたいんです。

昭和五八年（一九八三年），京都で一人暮らしをはじめた。五六歳である。しかし京都では仕事がなかった。翌年，かつて事業で取引のあった神戸の会社で住み込みの仕事をすることにした。このときに借りたアパートが，自分にとってはじめての城だった。次の年には，「大阪人て，落ち込んでも助けてくれる」と思い，大阪に移ろうと思うが，家賃が合わないので，西宮に引っ越す。

それから二十年，林さんは西宮で暮らしている。

もう三年前になるかね，詩の柔道……神戸文化会館でね，拳闘みたいのがあるです，そう，詩のボクシング，出ました。リングで読み上げた。だめでしたけどね。インタビューされて，関西テレビには出てましたよ。これ読んだんです。

出会い

いつも孤独だった　けれど不思議に明るかった
あなたという人に会えたから
人は自然の摂理にしたがい　生きていくべきなんだ
私はあなたといつも生存していた
孤独ではなかった　一人でもできること
ただ祈ることだけ

恐い，恐ろしい，恥ずかしいいうのもあるけどね，自分の詩を自分で読むのも，まあ人生のうちに一回ぐらいあってもいいかな，と。満足しましたよ。

まあ，私ら，こうして読むだけですけど，若い人はジェスチャー付けて，やらはるんです。「おー，行くぞー」とかいうのが文章のなかに入ってたりね。カタコトカタコト，と電車の音さして，その詩を読んだりね。それが私には出来ひんですやん。だから駄目なんですよ。

詩を聞いてくれる先生は，後でまた批評に出すように，もっと書いてくださいと言ってくれはりましたけどね。でも結局，これはいい，言ってもらえる詩が一編もできひん。「もっと書いてください」言われて。中途半端（笑）。

占いしたら，占いも中途半端（笑）。友だちがやったんです，で，「よう性格が当たってるからね，あんたの性格，自分で分からへんやろ，いっぺんやってみ」言うから，私やったんです。そしたら中途半端なんですて（笑）。でも面白い，五百円で。

何でも，センセ，もう好きなことやってますわ。

既に数編の詩や旅行記などをワードで入力しているのだが，ファイルが見つからないというので，テーブルの側にある富士通のデスクトップパソコンを起動して，ワードを起動して探してみると無事に開いた。ついでに，既に入力している詩の行間を狭くしたいというので，ワードの「書式」から行間を設定する方法を伝えた。それから，USB メモリーがあるので，デスクトップに保存しているファイルをそれにコピーしたりもした。林さんは，その作業を傍でじっとみている。

■地震，戦争，子どもの頃

ひとしきりパソコンの作業のあと，ぼくは，どうしても地震のことを聞きたいと思い「地震のことを，今でも思い出されますか」と尋ねた。

ときどきね。私はね，やっぱし，地震でこないなったけど，でも，国全体のものと違いますやん。私らが，地方でも地震起こって，いろんな心の傷もっ

た人が多いけど，私らは私らで，「ああ，あの時，家が倒れて，誰か亡くなった」とか。でも，このごろは，時代の流れがすごい早いから，ときどき思い出しますけれど，空襲のほうが，まだやっぱし大きいです。

まざまざと思い出すのは，地震のときはパアッと家も消えて，あと交流がないでしょ，今，自分がそこに住んでんのとちゃうから，そやから「みんなどうしてるんかなあ」いうのんでも，「元気なかあ，どこで何してるかなあ，私らと同じような生活しているかな」と思うぐらいでね。

でも，戦時中は，ひどい。背中に弾があたって，それ運んではるのを見てるからね，そっちのほうがきついです，思い出としては。思い出しますね，イランとか，戦争の話を聞くと。だから，日本，テロ起こったらどうしよ，そんな心配するけど，地震起こったら，もうこれは天命やから，しゃあないなぁ……戦争は自分らで起こすもんでしょ，でも地震は自然界で起こるもんやから，何ともしようがないです，だから日頃の備えはしとかなあかん，思いますよ。でも防ぎようないですもん。

みんな同じ所に戻ってくるか思たら，ちりぢりばらばら。だから「今頃どうしてはるかな」ぐらいしか，思い出せしませんね。今，行ってもですよ，もうちゃんと家建ってますやん，きれいに。

戦争の時は，もう何年も，その，空襲の跡があったからね。これは年代の違いかなあと思いますけど。若い人はどう思てはるか，知りませんけどね。私は，まじまじと，あの空襲見てますしね。人が怪我したの見てるから。地震とどっちと言われたら，やっぱり青春時代の思い出が，きついわ。昭和十九年，二十年にあったから。昭和十九年いうたら，私が十七でしょ，昭和二年生まれやから。その時の記憶やから，なかなか去らしませんね。だから戦争はしてほしくない。イランやイラクの人のこと，考えますねん，地震よりも。「かわいそうやなぁ」。人間の力でできるもんが。今の政治にも不満やけど。だから，今度生まれる時は，やっぱし，戦争のない国の政治をしたり，老人をもっと大事にしてほしい，と思います（笑）。

話は，彼女自身のことに移っていった。

今，お世話になってる病院の先生が，「あんたを，おれは絶対，手本にする」言うから，「何を見習うの，自己本位のことを見習うんですか」言うたんですよ。「いや，人にね，あんまり，つらいことを言わへん」と言わはる。あの先生とも，ここへ来てから，ずっとお父さんの代から付き合うて，今，息子さんが継いではるんですね。「親父に，あの人を見習え，見習え，言われた」言うんですけどね。この間，死にはったんですね。そう言うてくれはるんですけど，ひとに手が不自由ということも言わへんし，それはまあ自分でも，ひとに言うてもしゃあないしねと思てるから，言わへん。整形の先生にも，「肩が痛いし，首から頭に，先生，だんだん歳いって悪なってくるよ」言うたら，「普通の人間でも，肩が痛なったりなんかするのに，あんたはもう肩がやられてるんやから，しゃあないねん，どうしようもないねん」って，そう言わはるんです。私は「そう，どうしようもない。ほんなら，横には動かせるように，自分でするわ，もう。先生，匙投げてはるんやから」と，はっきり言います。他の人やったら，どうしようもない言われたら，しょげますやん，もう先生が，あかん，言われたら。それを私が，「この高さで横に動かせるように自分でやるわ」言うたら，「あんた，そやから，ここまで生きれたんやで……食道手術し，胃手術し，腸手術して，もう，おまけに手まであかんようになって，それでも，暗くならへんから，僕，好きや」言うてくれはります。「あほやから，考えてしまへん」言うてますけど。

親のしつけでしょうかね。小さい時から，母親でも，九九を覚えへんかったら，戸のところに貼って，台所で天ぷら揚げながら，私に九九を教えて。その「くそ負けるか」いうのをいっつも……喧嘩でも，喧嘩して帰ってきて，泣いて帰ったら，親父が，すごく怒りました。「なんで泣いて帰ってくる。負けたら，やり返してから帰ってこい」言うて，追い出されましたしね。成績悪かったら，次がんばったらええねんけど，「ええよ」ってお母さんもそう言わはるんですけどね，親父は違うんですよ。「がんばる，とか，そんなこと言うてたらあかん。今すぐ，がんばれ」。何や，訳の分からんこと言われて，いっぺんは私，小学校六年生の時，通信簿もうたら，だいたい九か十やないと，お父さん，駄目言わはるんですよ。それが七やったんですよ，算数が。ほな怒られますやん。表に放り出されるんですよ，いつもね。これは困ったと思て，お母さんの財布から，紙のお札やなかった，なんぼ摑んだん

か知らんけど，財布から，丸いお金ばっかり摑んで，お母さんのおばあちゃんの家，行きました，和歌山へ，一人で。どないして行ったか，分からへんのですよ，ま，いつもお母さんが連れて行ってくれるから。

とにかく人に負けるな，負けたらあかんいう，それが親父の……喧嘩でも，家でトランプしてても，お父さんに負けたら，怒られるんです。「なんでもっと頭，使わんか，なんで親父に負けんとこ思わへんのや」言う。それが，今まで来てるかもしれないです。

小学校六年の時，弟が二年やったかな，喧嘩に負けて，校庭でやられてた，私，箒（ほうき）持ってね，部屋掃く箒，学校でですよ，その男の子のところに叩（たた）きに行きました。で，有名になりました，それこそ全校で有名になりました。叩きにいって，あのお姉さんこわい，いうて有名になったら，お父さん喜びました。「弟が泣かされたら，叩いてこい，それが普通や」言うて。

最後に，こんなやりとりになった。

「林さんには，びしっと一本，真っ直ぐな線がありますよね」

「こうして，センセが言うてくれはるように，一本で筋の通った道を行けたというのは，みんな周囲の人のおかげでね。そう良い性格でもないねんけど，みんなから何となく優しうしてもろて」

「十年ぶりとは思えない，何というか……」

「明るいですか」

「明るいというか，お元気そうな感じがしますね。もちろん，体力的なところは分かりませんけど」

「体力的には，足も……センセが一歩，歩くところを，うちは二歩ぐらい必要やろなぁ」

「昨日，電話では，ちょっと話すのがゆっくりかなあと思たけど，今日こうやって話を聞いてて，電話のイメージほどは……。そんなに変わった気はないでしょ，ご自身で」

「いやー，今ちょっと歯があかんのかな。それと，私は，だいたい，はっきりと喋らへんほうですね。甘えたみたいな喋り方するいうて，よう言われるですよ」

「その発音が……そうかな，ぼくは非常にはっきりとしていると思いますけど（笑）」

「ハハハ，何か甘えたみたいな喋り方する，言われるんで，いっぺん自分でやったことあるんですよ。声がね，はっきりしゃべれへんいうのが……やっぱし入れ歯のせいでしょうかね」

「ハハハ，そうかな……。ぼく，今日，はじめに，間違うて『八十九やなくて，七十九』って言いましたけど……」

「八十九で，私こんなんやったら，大喝采！でも，うちのおばさん，九十五やけど，うちよりは，皺ないし，肉食べる，魚食べる，何でも。そいで今，九十五で，車押してますわ，入院してる息子の車椅子，五十五キロありますねん。私，二日間，車押したら，肩が痛うて，たまりません。ボケてないしね。九十五歳で。『息子のため』言うて。息子は息子で『お母はん，長生きささんなんから，わし，こないなってん，長生きしよんでー。わし，おかんのために，車椅子のったんてんねんでー』。お母さんも『息子のためにな，なんぼ歳いっても息子は息子』いうて，やってます。私は『ええなあ，あんたら二人。私なんか病気しても誰も来てくれはらへんけど』言うて……」

昭和二年（一九二七年）生まれのひとりの女性の話である。七九歳の彼女は，二〇〇六年の現在，自分らしく暮らしている。一九九五年の地震で避難所に居た独居老人という枠に該当するけれど，そうした枠というものが，彼女を理解する手がかりにはならない，と改めて思う。

まわりの人たちを冷静にみつつ，自分なりに判断して暮らす。簡単ではあるけれど，こうして現在のことから子どもの頃のことまで，しっかりと判断して淡々と語ってくれることに感謝しつつ，ぼくは自分が彼女を尊敬しているということに気がつく。強靱な姿勢という表現は適切でないかもしれないが，淡々と語る彼女のなかに，戦後の世の中に対する毅然とした姿勢というものまで感じられる。

インターネットで情報収集をして，一人で旅をする。中学生，高校生とプリクラのお店で会話をする。サスペンスものや数独の本を読む。携帯電話も持った。そして，前々から続けている作詞も，詩のボクシングに出場したり，自分でパソコンに入力して，きれいにまとめ，出来ればそこにイラストを加えたいと考えている。

「普通の人よりもわたしは恵まれていると思います」。十年前の彼女の言葉が，思い出される。地震か

ら十一年が過ぎたといっても，彼女の生活は，彼女のペースで続いている。それは，彼女の人生のなかで，すべて連続していることなのである。便利が悪いので，仮設から市営住宅に移ったら，より一層，不便になった。それでも「暗くならへん」のである。それは彼女にすれば「ひとに言うても，しゃあないしね」という単純なことなのだろう。しかし，彼女はそうした生き方をこの二十年間にわたって実践しているのである。

（2006年12月27日　未完）